

エリザベス朝代女番長^{スケバン}一考察

—— The Roaring Girl or Moll Cut Purse 作品論 ——

関本 まや子

一六一一年、ロンドン取引所にほど近いトマス・アーチャーなる書店に、幸運^{フオチュン}座で上演し当りをとった戯曲が、四つ折版の体裁で売り出された。外題は『女番長^{スケバン}こと巾着切りのモル』とある。ミドルトンとデッカーの共作となっているが、概ねミドルトンの手になったであろうことは定説となっている。書き上げられたのは一六〇七年か一六〇八年頃と推定されているが一六〇四年説もある。

今ではこの芝居は殆ど知られていない。再演されることも絶えてなかった。読んでみると実に変な作品である。主人公の性格が曖昧模糊としていて、読者はそこに淪落の女

の姿を見ればいいのか、それとも正義の使者の姿を読み取るべきなのかわからなくなる。五幕二場になって大団円が近づくと一気に後者の性格が強調され始める。だが、それにしても、筋の通った統一的印象が結ばれないのはなぜだろうか。ひとつには、主人公についての劇中の批判が、それを口にする人によって、まちまちであること、つまり、複数の視線が導入され全体の印象が一本に収斂しないように仕組まれた劇構造をとっているせいであろう。それともうひとつは、作家自身の視点が、時に意図から外れて揺れることにかかっているように思える。

この芝居のタイトルになっている Roaring Girl とは何を指すのだろうか。roar とは喚き散らすという動詞で、ここから傍若無人な振舞を人前も憚らずにするといった意味が出てくる。尤も、当時の呼び名としては、OED に当つても、Roaring Girl という言葉が使われているのは、この作品の題名だけであり、Roaring Boy という名称が頻出して、定義には、エリザベス女王からジェイムズ一世の時代の野放図な男の意とある。初めて roaring boy という言葉が使われたのは一五八四年のジョン・リリーの『サフォとファオ』(Sappho and Phao) であり、われわれが取り上げているこの芝居が店頭に並んだのと時を同じうして出版されたハーフォードのジョン・デレイヴィスの『阿呆のこらしめ』(The Scourge of Folly) には、「roaring boy たちが生きている限り悪魔は決して消滅しない」という一句があるのを見ても、この roaring boy たちが街をわが物顔にし歩き人の迷惑になっていたことが容易に想像される。では、このような社会からはみ出し者、いわば今日の非行少年のはしりのような社会現象を引きおこした当時の英国の社会の実状はどのようなものであったのか、それを一寸ふり返ってみよう。

一見この上もなく華やかで「国威は隆盛におもむき」と史家の言うエリザベス朝時代は、その実、次のジェイムズ朝代にかけて慢性の失業問題に苦しんでいた。一五四〇年にピークに達した対アントワープへの毛織物輸出も、イギリスの工業力の強さの上に安定的に築かれたものではまなかつた。それには産業革命を待たねばならない。この時期の輸出ブームは、ポンド安という為替レートの変動によるものであった。一五二二年の対仏戦争からポンド評価は下りはじめ、一五三〇年代及び四〇年代にわたってしばしば繰り返された鑄貨の改悪により国際的にポンドの評価は下落の一途を辿った。従ってイギリス毛織物は、外国からみれば格安品となり、売れゆきが伸びたのであったが、女王がグレシヤムを起用し悪貨の駆逐に努力し、ポンドの国際為替レートの恢復をはかり始めると、皮肉にも輸出は一挙に不況に陥り、以来、長きにわたって低迷状態がつづく。

毛織物関係の仕事を失った労働者、地方で農地を失った百姓たちは、たび重なる浮浪者取締り法や職人法にも拘わらず、社会の固定化を目ざす政府の試みや女王の布告をいかくぐって、貧民の群となってロンドンへ流れ込んでゆ

く。その速度が如何に速やかであつたかは、ロンドンの人口が、この時期から次の世紀にかけて、五万人ないし六万人であつたのが五〇万人へと急増していることから窺えよう。生活手段を持たぬ貧民の群は、戦争帰りの失業兵士たちによつてますます増大していった。一方、地方に所領地を持つナイトや郷士たちも、華の都の宮廷を目ざして上京して来る者が跡を断たなかつた。このように巨大化した都市で、しかも貧富の差が激しく、様々の要素の渦巻く処では、当局の治安の努力や秩序の掟を遙かに上まわる犯罪がひしめいていた。追剥ぎ、巾着切り、強請、ペテン、暴力的ひったくり、いかさま賭博、美人局、釣上げ盗み、売春、その他可能な限りの悪が横行する裏社会が存在していた。この辺の事情は、当時のパンフレット作家、トマス・ナッシュやロバート・グリーン^{Robert Green}の筆で実に生き生きと描かれてゐる。こういったパンフレットや当時の戯曲、裁判所の諸記録などを土台として、G・サルガード^{G. Sargant}はエリザベス朝の裏社会の様子を描いている。この吹き溜りのような社会の中で、捌け口の無い鬱憤を持てあます若者たちは、街をのし歩き人前を憚らず喚き散らし、乱暴狼藉や喧嘩に明け暮れしていた。当時の芝居や社会時評などに

roaring boys の呼び名でしばしば言及されている手合いのことである。

それに対応する女性が roaring girls であるのだろうが、この呼び名はミドルトン^{Middleton}が初めて自分の芝居の外題に用いるまでは、存在しなかつた名称である。この芝居の序で、彼は観客に向かつて語りかけている。

「長く待たされた芝居だけに、お客さん方は、素晴らしいことを期待しておいででしょう。併し、何しろ主題がそんなに立派なことではないのですから、この芝居が高らかな調子であらう筈はありません。ただ、これまで聞いたこともなかつた roaring girl なるものが、笑いで劇場を満たすことだけは請あいです。昨今では悲劇的情熱や真面目なことは流行おくれになっていきます。今、皆さん方は注意深く耳をそばだてて、この女番長とは如何なる女かと待ちかまえておいでです。それと申しますのも、この手合いの女たちは実は沢山いるのでありまして、或るものは夜ふけて居酒屋で深酒をしゃべり、嬌声を発し、夜警をぶん殴り、他のものは、真つ昼間、罵り喚き散らし、刃傷沙汰に及んだり、派手な啖呵をきつたりする。しかも素性卑しい阿呆男どもの情欲に身を売つたりもす

る。こういう手合いはイモ番長。それに対して町番長がおります。誇り高くて、宴会騒ぎにうつつをぬかし、高級馬車を取りまわし、亭主は身代を浪費され負債者牢で泣き喚ぐ。ここに登場するわれらのスケ番は、そのような手合いではまったくない。もつと高いつばさで飛びます。その名をお聞きになりたいか。氣違いモルと呼びならわされ、その生活は芝居が演じておみせする。」

この序が示すように、まともな社会の秩序からはみ出した女たちがいたらしい。女の憤みもあらばこそ、人前で傍若無人な振舞をし、田舎番長とここで呼ばれている一団は、夜鷹稼業までしたのもらしい。併し、モルはそのような女ではないと作者は言う。では、どんな女として描かれているのだろうか。

芝居の構成は、主筋となつてゐる裕福な貴族と商人階級、脇筋となつてゐる中産程度の平凡な町人階級と無資産の伊達男たちのそれぞれが繰りひろげるロンドンの生活である。富豪のサー・アレグザンダーは息子の結婚にあたって、相手の娘の持参金に不満となえ、愛し合う二人の若者の結婚を認めようとしな。反対を押し切つて結婚する

なら、遺産はびた一文も与えぬと言われ、他に生活手段のない息子のセバスチャンは一計を案じ、鉄火娘のモルに助けを求め、モルと結婚するかのように父親に思いこませる。評判のよくないあばずれ女を嫁にすることは断じてならぬと父親は心痛し、あの手この手で妨害に大童となる。息子は負けずに父親に反抗し、あわや結婚するかに見えるところまでもつてゆき、父親はモル以外の女性なら、誰と結婚しても認める、まして最初に反対した娘となら願つてもない結婚だと心から思うようになる。こうしてモルの協力のおかげで二人の恋人は結ばれる。一方、ロンドンの町の三軒の商店の夫婦とその知人たちの間におきる纏れと結着とが脇筋になつていて、二つのグループの間をモルが自由に往き来する仕組になつてゐる。

主題役のモルは一体どのような性格として描かれてゐるのであろうか。この問いは読後まで未解決のまま残る。それはモルが統一的なキャラクターとして掴みにくいことに由来している。作者の意図はどこにあつたのか。一部には共作であるという背景もあるが、それにしても、モルの性格について、二人の作家の間で、少なくとも芝居を成立させるに足るだけの統一的見解はあつた筈である。彼女は

男装している。一六一一年版の扉絵には、モルの男装姿が描かれている。ズボンの前身の「ホーズ」をはき、マントを羽織り、片一方のマントの裾を肩の上にはね上げ、左手には剣をきつ先を上にして握み、右手で長いパイプをくゆらしている勇姿(?)が印刷されている。セバスチャンの父親アレグザンダーにとっては肝を潰す姿であった。

こりや何たる！ズボンだと！何と、息子の奴は、

両性具^{ふたなり}有の化物と結婚するつもりか。何という世の中だ。

女房がズボンばきなら、亭主は道化の仕着せのスモックを着ねばなるまいて。

(二幕二場七四—七六)

彼の目にはモルは堪え難くおぞましい女であった。

忌まわしい女だ……。

造化が女を賤しめるために生み出した^{けだもの}獣だ。

あいつはすっかり出来上る以前に生まれてしまったのだ。

男よりは女と言おうか、女よりは男と言おうか、そしてこんなことは誰にも起り得ないことなのだが、太陽は一つの姿に

二つの影を与えたのだ。

(二幕二場二四—二三)

モルが女らしくないと非難するのは、アレグザンダーに限ったわけではない。彼女が登場する当時のもうひとつの戯曲、ネイサン・フィールドの『貴婦人への償い』(Amends for Ladies, 1611 or 1612) の中では、彼女は女主人公グレイス・セルダムから同様の厳しい言葉を浴びせられている。

淫蕩で恥しらずで、

私たちはお前を男と呼んでいいのか、女と呼んでいいのか分りません。それというのも造化の神が、お前をどちらかにはつきりさせることを恥じて、性のないままでこの世に送り出されたからです。

あるものはお前を女だと言ひ、あるものは男だと言ひ、男と女の両性だというものも大勢いる。

だが、私は、どちらでもなく、昔のケンタウロスさながらの半人半馬のけだものだと思っています。

実はモルには実在のモデルがいた。「巾着切りのモル」

とか「氣違いモル」とか呼ばれたメアリー・マールカムことメアリー・フリスがその人である。彼女は巾着切りで娼婦で女郎屋の女将で盗品故買人であり、掏摸たちの元締であり、闇の世界に顔の利く人物であった。氣性が激しく思い切った行動をしたことは、次のような実話からも察しがつこう。四〇歳後半から五〇歳代のことであった清教徒革命中、彼女は議会軍総司令官フエアファックス將軍を待伏せして腕を撃ち、從兵の馬二頭を殺して、積んであった金を奪い取った。併し、ハウンズロー駐屯の議会軍將校たちに追われ、ターナム・グリーンでつかまり、ニューゲイト監獄に投獄され、絞首刑の宣告を受けた。だが二千ポンドの賄賂を使って出獄している。彼女の行状は死後すぐに出版された匿名のパンフレット『メアリー・フリス夫人、通称巾着切りのモルの生涯と死』（一六六二年）から知ることができる。それによると

「彼女はまったくのおてんばで喧嘩好きで、唯々、男の子の遊びや娯楽だけを好んで、女の子との遊びには加わりもせず、見向きもしなかった。この猛々しさのために何度も殴ら

れたりぶたれたりしたが、それでもおとなしくはならなかったし、粗暴な性癖がとれもしなかった。彼女は縫ったり刺したり坐っている生活には堪えられなかった。刺繍のお手本にいたっては、まるで死人の経帷子きんかきのようにぞつとする代物であった。縫針や編針や指抜きのことなどを大人しく考えていることはできず、そういったものが、ちゃんばら用の長剣や短剣に変わればいいのと思うのであった。」

長じてはいつも男装で出あるき、伊達男を相手に俠客ばりに渡りあったり、ロンドンの高度に組織化されていた裏社会のなわばりの中で姐御的存在として盗品の処理や、新入りを訓練する泥棒学校の経営にかかわっていた。そのほか、彼女のあだ名が示す掏摸、巾着切りからその他ありとあらゆる金儲け目当ての非合法的な犯罪に明け暮れし、あばずれの名はつとに高かった。このような人物をなぜミドルトンたちは正義の使者の役わりに仕立てて芝居を作ったのだろうか。彼女を美化しようとする作家の意図は果して成功しているであろうか。掏摸、巾着切りをなりわいの一つにしていた彼女が、芝居の中では、断じて盗まないことになっている。尤も、サー・アレグザンダーは彼女を泥棒

と決めてかかっている。

わしの倅めは、世間が蛇蝎視する泥棒女、

あの恥しらずのあばずれと結婚するというのが。

(五幕二場一一二)

彼は息子と密会するために自分の屋敷にやって来るモルを罫にかけようとして、金鎖つきの金時計やダイヤをわざと目につき易い処に盗めとばかり掛けつらねておいて、隠れて見張っている。だが、モルは彼の予想に反して指もふれようとしない。彼女には盗みの氣ぶりもないのだ。

モル ……懐中時計だ、これだと何時かな？

アレグザンダー さあ、今だ、罫にかかったぞ。

モル 一時と二時の間だ。まあどうでもいいや。時計と楽士というのは、一つのことでは、いとこつてとこだな。両方とも拍子をとちっちゃいいとこなしてわけだ。時計は壁に叩きつけられて当りまえだし、楽士はヴァイオリン・ケイスで脳味噌を叩き出されても仕方ないよ。あれ、鎖とダイヤモンドがぶら下つて。こりや夜盗に

とつては豪勢なボロ儲けになるだろうよ。大勢のおあにいさんらは大喜びで、窓から二度も下見をして、砂袋の中のうなぎよろしく体をよじらせて入ったり出たりするこつたろうよ……。

(四幕一場一二四——一二九)

巾着切りという表題の呼び名にも拘わらず、彼女は決して盗んだりしない。それどころか、この不名誉な名前に對する弁明さえ与えられている。

サー・トーマス なぜ口さがない世間はあんたのことを巾着切りのモルなどと呼ぶのかね？ 忌まわしいひどい名だと思ふがね。

モル 誰が私の面前に進み出て、「モルよ、お前さんの現行犯を目撃したよ」と言いきれるものがありますかね。若い日に私はほつき廻り、まむしのような手合いの間に坐り、そいつらの毒牙を目にしてみました。それぐらいのことなら、ここにいるどなたさんにだっておきうることでしょうがね。そして満員の芝居小屋で奴らの手が素早く人の懐中を探るのを目撃し、そいつらを恥かしめて

やったものでしたよ。で、そういったあんばいで悪名がつきましたのさ。

(五幕一場二八七—二九五)

ひきつづきモルは貴族サー・トーマスやノーランド卿(土地を失いロンドンに移住した、当時の典型的な貴族を象徴する名前)に対して、自分の持っている、いかがわしい裏社会の知識を披露している。

例えば、隠語で仲間内だけに通用する職種などであるが、これは他所では入手し難い情報なので記録しておく。
litter は品物を釣り上げるコツを教える人のことをいう。
cheating law はいかさま賽を使って金をまきあげる技のことである。そして、この技を実践するものは自分たちのことを cheat と称していた。いかさま賽は cheater まきあげた金は cheat と呼ばれていた。更にこの cheat なる隠語は物 (thing) を意味し、従って複合語として多岐にわたる使い方がされた。例えば、隠語で頭 (head) を意味する nab は、前者を結合させて nab cheat といえ、つばが有る無しに拘わらず帽子 (hat or cap) のことであつたし、muffling cheat といえ、napkin^{ナプキン}を、belly cheat は apron^{エプロン}

を、ぶうぶう鼻をならすもの、grunting cheat といえ、豚を、くわつくわつと鳴くもの、cackling cheat といえ、(去勢して無くても cock、あつても capon・食用)雄鶏を意味した。quacking (ががああ鳴く) cheat といえ、家鴨 (duck) であり、trining cheat は hanging thing つまり絞首台 (gallow) を意味するといった具合であつた。nip は巾着切り、その助手をつとめるものを相方 (snap または cloyer) と呼んだ。掏摸^{じふぽう}は隠語では foist と呼ばれていて、その相方をつとめ、カモの注意を惹くようにわざとまじまじと見つめる役をする男は state と呼ばれた。窓から釣針で品物を釣り上げて盗む男を curber といい、その技術を curbing law といい、使用される釣針を curb といった。この方法にも二通りあつた。普通には釣り師を意味する angler なる語も、隠語として使われる時には、五フィートから六フィートの長さの釣竿を使う盗人を意味した。おおむね彼らは日中に家から家へと物乞いをして歩き、獲物になりそうなものを物色して当りをつけておき、真夜中になつてから、例の釣竿(先端から一インチ以内の箇所)に穴をあけ、鉄の釣針を通したもの)を持っていき、衣類であれシーツであれ、またはベッドの上掛、その他何なりと

鉄針にひっかつたものを窓から釣り上げて盗み出す手口を使った。また、馬専門の盗人 (horse thieves) は闇の社会用語で言うところ、priggers of prancers ということになる。

prigger は時には priggard とか prigman とか呼ばれることもあるが、等しく盗人一般を意味した。尤も prigman の場合は特に、棒を手にして生垣に干しかけてある洗濯物の衣類を盗む者を指すことがある。

こういったいかがわしい情報に通じていることから当然起る、モル自身に対する疑いはノーランド卿の間に端的に表明されている。「一体なぜあんたは、こういう汚らしい悪党連のことをそんなによく知ったのかね」。それに對して作者はモルに自己弁明を与えている。彼女がこのような知識を得るに到った経緯と、彼女自身はいかなる犯罪行為からも潔白であるということを釈明させている。更にモルが言葉をついで、このような知識が、何も知らない善良な一般人を危険から救う、有益なものであることを力説するのを聞く時、われわれは、モルの口を借りて語られるミドルトンの言い草の中に、彼と同時代の作家トマス・ナッシュやロバート・グリーン^{Robert Green}の肉声を重ね合わせて聞く思いがする。二人とも大学出^{ユニバーシティウツ}の才子たることを鼻にかけつ

つも実生活は放蕩無頼のきわみで、六年間にもわたる監獄生活の経験を持つナッシュは言うまでもなく、グリーン^{Green}の生涯にいたっては、まさに目を蔽うほどのものがあつた。

同情的にみて、ひとつには時代の不況ということもあつて、大学を出るには出たが、満足のゆく職には就けず、パンフレットを書き殴り、芝居作者として口を糊せねばならぬということもあつたろう。それにしてもグリーンが死にのぞみながらも、さし迫つた、幾ばくかの稿料の必要から書き残した『百万の後悔で購つた三文の知慧』という自伝的作品から彷彿として浮かび上る彼の生涯の悲惨さは、読む者をしてまさに慘憺たる想いを抱かせずにはいない。一年の結婚生活の後、妻を捨て去り、最後の遺言の中で虫のよい金の無心をするだけで、一度として顧みることもなしに、ひたすら放蕩に明け暮れし、闇街道に生きる無頼の徒を仲間とし、その頭目の一人で最後は絞首刑に処されたジョン・ボールの妹を情婦として一生を送るのだが、作家としての貪婪な目は、この仲間たちを売り、かれらの詐欺、ペテンの生態を扶るように伶俐に捕え、しかもそれを抱腹絶倒の滑稽さで、あますところなく暴露しつくしている。まさにモルの裏街道の知識と同質であり、更に面白い

ことには、この三人ともあくまで観客なり読者なりを楽しませようという意図が見え見えであるにも拘わらず、自分たちの真意は、この闇の知識が世人にとって有益であるがために、悪人の詐欺、掏摸の手口を公表したのだという大義名分というかモラル・スタンスというかが非常に似かよっている。この点で三人とも時代の子という感じが強い。思うに、当時、このような、まっとうではない社会への興味を当てこんだ実話まがいの際物かはやっていて、作者は自分たちの意図が世間を裨益するためであるという建前を常に前面に押し出し、当局の検閲をかわすことを忘れなかったものらしい。

モルは盗人仲間からいち目おかれていて、彼女の口添があれば、被害にあった物品もとり返せたと『モルの生涯』は語っている。それはこの芝居の中にもとり込まれている。モルと一緒にいた紳士の群にうかつにも近づき、仕事をしようとした巾着切りたちを素早く見抜いたモルは、逆に姐御口調で掏摸たちに命じている。

いいかい、私がいろいろ世話になった義理のある騎士^{ナイト}さんが
白鳥座でこないだの新しい出し物を見物してなさった時に、

エンジェル金貨が七枚入った財布をなくしたんだ。
ちゃんと償いをしときなよ。それが身のためだよ。わかったかい。それだけさ。

(五幕一場二七九―二九二)

では、売春行為に関してはモルはどのように扱われているのか。それは非常に複雑である。しばしば彼女は口汚く淫売婦(die)呼ばわりをされている。

アレグザンダー 皆んな、聞いてくれ、息子の奴めは巾着切りの、この淫売女を娶ると言いはるのだ。
おれの腹わたは煮えくり返る。

(一幕二場一七二―一七三)

下級官吏のカーティラックスがモルに職務妨害をされるのだが、それを犯罪視するのは、あくまで権力をかさねる木っ端役人の側からのことで、モルの側に見れば、遊び人の伊達男を捕縛吏の手から逃がそうとする仁俠行為ということになり、その間の価値判断は微妙であるが、少なくともカーティラックスの目にはモルは次のようにう

つっている。

俺はお前をよく知っているぞ。お前なぞ、どんな男にでもしなだれかかる淫売婦じゃないか。

(三幕三場二〇六)

モルを何とか息子の許から排除しようと図る老アレグザンダーは、彼女に盗みの罪を犯させようと、高価な品物を「サイド・ボードの上に置いて、あの泥棒淫売の目 (side-whorish eye) を、いやが上にも引き付けろ」(四幕一場一七一八)と下男に命じ更に、「あの女が盗み残したものは、お前が忍びこみ盗み去れ、そうすれば罪の重荷をあいづの肩に負わせてやる」というのに対し、下男は卑猥な意味をこめて、「あの女は押えつけられるのが好きだから、重みはすべて肩ではなく腹の上のらなきゃあ」(四幕一場二二二六)と答えている。この下男はやがて仲間と組んで、「戦争帰りの失業兵士」をよそおい(これは当時の不況社会を背景にして、舞台の上でも一つの典型的人物^{キヤラクター}となっていた)紳士の一団に近づき金をせびろうとする。併し、彼は目敏く自分の雇い主であったモルの姿をその内に認め、

畜生、一緒にいるのはモルだ。女郎をやらかしてる俺の旦那で女主人だ。あの女の腎臓を俺の歯で喰いちぎってやりてえよ。

(五幕一場六一一六三)

その後モルは、また別の拘摸の一団と行きあう。

巾着切りの二 畜生、俺たち感づかれたぞ。

巾着切りの二 一緒 えっ！

巾着切りの二 やばいぞ。いまましい女め、梅毒にとつつ

かれやがれ、見ろ、モルだぜ、あの突っ張り売女のさ。

巾着切りの一 ロンドン中の疫病がはいつにとつつきやがれ！ 退却だ。

(五幕一場二七一—二七四)

モルが売春婦だという印象は、上の例にあげたような繰り返しによつて累積的に強められている。それに対するモルの自己弁護は他のどの人物よりも、いちどきの台詞としては長い行数が与えられている。モルには普通の場合、自然な語り口のきびきびとした口語的散文が圧倒的に多いの

だが、この時は韻文になっている。彼女を初めから淫売女と決めてかかり、強引な誘いをかける男に、怒りを爆発させたモルは剣をひき抜く。驚きあわてる男が、一体どういうつもりだと問いかけるのに対しモルは次のように答える。

あなたの卑しい考えにマナーつてものを教えてやるためさ。
あんたなんか女は誰でも、わけなくものにできる売女だと思ってる手合いさ。もし女が流し目をくれたり、ふり返ったりしようものなら、それだけでもう、あいつは俺のもんだとくるわけだ。会食の席でさえ、誰かがたまたま最初にあんたに乾盃しようものなら、あの女は完全に俺にいかれているというわけ、それどころか、貴婦人がちらりと一瞥でもくれるものなら、その女のペット猿が生涯一緒にいて気に入られるよりずっと大そうなお気に入りなんだと、仲間の騙され易い色男たちに吹いてるんだ。どんだけ大勢の女たちが、あなたのような男のせいで、善良な好意をあられもない浮き名でお返しされてきたか。ふしだらなことをしたわけでもないし、まあ、せいぜいキスとか、一つコップを共有するところまで、ベッドまで共有するほどの深入りは決してしてな

い女がさ。良心とか魂の汚れなんてのを抜きにすりゃ、女はね、やって黙っててくれる男の方が、やりもしないのに、ほらを吹きまわる男の手にかかるよりずっといいのさ。ところで何だっただあたいのことを淫売だと思っただのさ？ あたいを悪く言う陰口の片を付けられるんなら、ドイツから来ているあの大男の剣士の喉もとからだって、その淫売つて名をひっぱがしてやりたいよ、そこに貼りついてたとしてもね。あんたを見ると、男なんてみんな、へん！ 何だ！ って思っちゃうね。男らの憎しみも、うまいおべっかも、あいつらが馬鹿な女の魂を危険にたらし込む、金色の魔法も、みんな軽蔑するね。貧しいお針子や商売のうまくゆかないかみさん連は、喰いつきたい、もしくは自分が喰いつかれないかみさんがついている魚のようなもんで、この腹べこの手合いは、金色の釣針につけられたみみずくに、すぐにひっかかるのさ。こういう女たちが、女たらしの食いもの、餌食になるんだ。奴はね、狙ってるんだ、夫婦喧嘩ばかりしてるかみさんとか、やりくりしてやっとなら生きているハイミスとかをね。これが奴の釣る最上の魚ってわけよ。だが、それにしてもなぜなのさ、やり手の漁師さんよ、どうしてあたいがあんたの餌食だと思ったのさ、まだ一度も釣竿を投げられたこともない

このあたいがさ。娯楽好きで、しょっちゅう陽気で冗談を言うからなんだろう？ 世間じゃ歓楽といやあ即色ごとしかないのかねえ。ああ、それじゃ楽しみという楽しみに恥がとりつくがいいや。だが、どんなにあんたや、卑しい世間が、あたいの生き方を非難しようと、いいか、奴らに言っておやり、勝っている方が四つん這になるなんてほうはないんだってね。男に身を売らせられるこのあたいがさ、なにも男にこっちの身を売ることはなからう。それじゃ一本お見舞するぜ。

(三幕一場七〇—一一)

韻文の形体はブランク・ヴァースで菌切れはよいのだが、内容の面からいくと、何とも奇妙な自己弁明である。骨子は、自分は潔白であつて、世間で言っているような淫売では決してないということ、一般的に言つて女を墮落させるのは男のせいだ、ドンファンを自称する男の嘘の自慢話で女の名譽が傷つけられているのだということにつきるのだが、これだけの長広舌にも拘わらず論旨に収斂性のないこととおびたらしい。あまつさえ、彼女の意図するところと反対の印象を与える表現が目立つのはなぜであらうか。本

来ミドルトンという作家は、人間性、殊に人間の深層心理にメスを入れる傾向が強い作家であり、特に女性の業としか言ひようのない暗く激しい情念や、白い肌の下に深く隠されたどろどろとした欲望を、好んで自分の描く女性の中に持ち込む作家であつたことを思えば、この読み方にしても、ひと筋縄ではいかないように思える。先に長々と引用したうちの次の二行なぞ、作者の頬にかすかに浮かぶ皮肉なうす笑いをさえ想像させてしまう。

Better had women fall into the hands

Of an act silent than a bragging nothing.

(III. i. 84-85)

または結語部の二行にしてもそうだ。

I scorn to prostitute myself to a man,

I that can prostitute a man to me.

(III. i. 109-110)

モルの台詞は prostitute (売春) 自体への倫理的批判には些

かもなり得ていない。作家の表面的な意図としては、モルという女性には売春行為からは潔白であることを、観客に受け入れさせようとしている。併し、モルの台詞の中には極めて際どい卑猥な表現や、彼女自身が自分を売春婦であると認めているような箇所がある。なぜこんな場面を作るのだろうか。モルの首尾一貫した像を結ぶ上に大きな齟齬をきたすようなことをなぜ敢えてするのだろうか。例えば遊び人ラックストンの密会の誘いに応じる時の様子はどうか。この直前にモルは、唯自分の鬱憤をはらすために、行きずりの罪もない男に八つ当たりして痛めつけている。それを目撃したあとでラックストンはモルに近寄ってゆき誘う。

ラックストン 恰好よくやつつけてくれたよな、実際。モル、男らしくな。ますますあんたに惚れたぜ。それにしてもいくじのない奴だったな。もしあいつが一寸でも反撃してくる様子なら、誓って、この俺が相手になってやろうと思つてたんだぜ。

モル 「俺があいつの相手になるつもりだった」だって？なぜあんたに助けてもらわなきゃなんないのよ。たかが

男一匹だったのにさ。

ラックストン そうだ、そうだ、まさにそのとおりだ。

モル それじゃなぜそんなことを言うのさ？ 人にくつわを取ってもらわなきゃあたいが種馬に跨がれないとでも思ってるの？

ラックストン 乗れるともさ。堂々と打ち跨ってくれよ。そんなことは先刻承知つてことよ。ただ、愛ゆえの早とちりつてやつさ。ぼっちゃりとした可愛い子ちゃんのモルよ、いつ、あんたと俺と一緒に町を出られるかね？

モル どこに行こうつてのさ？ タイバーン処刑場にでもかね？

ラックストン 違いえねえ、あそこも実際、町はずれだわな。あんたはいつだつて友だちに冗談ばつかし言うんだから。俺のつもりとしちゃ、色街のブレンフォードカステインズとかウエアあたりに行くつもりだ。

モル そこで何しようつてのさ？

ラックストン 陽気にやってそれから一緒におねんねするだけよ。四頭立ての馬車を一台やとつとくからな。

モル そりゃまた淫乱な道行きになりそうだねえ。四頭立てのうちの一头を節約してもいいよ。あたいがやくざ馬

(「淫売婦」の役をこなせば三頭の馬で間にあうからさあ。

(二幕一場二三八—二五八)

遊蕩児ラックストンを懲らしめるために、密会の約束を受け入れることを見せるだけで事が足りるこの場面なのだから、場所と時間の約束だけで済む筈である。にも拘わらずモルは、われからと必要もない卑猥な会話を繰りひろげる。おかげで彼女の統一的印象が阻害されることおびたらしい。しかもこのように、自分では否定している売春婦の地金がちらちらと覗くのは、この場面に限ったことではない。

例えば、セバスチャン親子の屋敷へ音楽教師の触込みでのり込んだ時、モルに対してセバスチャンは、壁に掛けてあるヴィオラを下ろして演奏してくれるように頼む。ここでヴィオラと呼ばれているのは、イタリア渡来のヴィオラ・ダ・ガムバのことで、これはチェロの前身の楽器で、下部が長くのび、これを演奏者は股の間にはさんで演奏した。このスタイルからの連想で、当時この楽器は卑猥な冗談の種に使われることがしばしばあった。セバスチャンの

次の台詞などもそのことを裏書きしているよう。

世間には気詰りな奥さん連が大勢いて、ヴィオラは御婦人には慎みのない楽器だと言って、そこからして君のことを悪しざまに言っている。そのくせ自分たちの方がもっと悪い目的のために、もっと股をひろげて坐ったりするんだ。

(四幕一場九六—九九)

やがてモルも演奏することに同意して、次のように言う。

モル いいわよ、そんなにあなたたちがヴィオラと私とを一緒にさせたがるんなら精一杯演^やってみるわ。その代り、言わせやしないわよ、殿方の部屋に私^いがもぐり込んだのに彼の逸物

(Instrument = a) penis cf. Shakespeare's Bawdy, p. 134)
口表面上の意味は楽器

を壁にぶら下げっぱなしにしたいなんて。

セバスチャン がかしたぞモル。だらんとぶら下げたきりで、君にそれをさし出さなかつたりしたら、その紳士の恥になったろうよ。

この直後、モルは自分の貞潔さを云々するのだが、もはや白は白としてのイメージを観客の印象の中に結び難くなっている。

たしかに剣を抜いて渡りあえば、やさ男なぞわけなく叩き伏せられるほどモルは強い。併しその強さは、必ずしも常に颯爽たる魅力になり得ているわけではない。二幕二場で彼女が従順なポーターに對してとる態度は、彼女の性格の粗野な面を浮きばりにしているし、同様なことは、仕立屋に最新流行のオランダ式ズボンを注文する時の彼女の態度にも言える。ズボンの型が変わるので、新しい寸法が必要になった仕立屋は、

すぐお部屋にいらつしやるのなら、誰かちゃんとした方にた
くして、おたくの太ももの寸法を手前のところまで届けさ
して下さい。

と頼む。モルは、

ああ、すぐにポーターにことづけよう。

と言いながら出てゆく。その後姿を見やりながら、独り言として仕立屋が口にする次の台詞などは、娼婦として鍛えられたモルの肉体のイメージをやきつける。

そうなる必要があります。精力絶倫の太股だ。それが二つとくりや、イギリスきつて屈強なポーターの背なかだつてみしみしと痛みましようぜ。

(二幕二場九三一九七)

傍線をほどこした単語は二度めに出了たものを避けて順に並べると、honest, thigh, porter, lusty, backとなり、それぞれ二重の意味を持つ語で、当時の文学や芝居には、裏の方の意味あいではしばしば用いられている。

彼女の娼婦の面と粗暴さとが結びついている例をもう一つだけあげるとすれば、二幕一場、場所はロンドンの商店街、この芝居の脇筋となつてゐる三軒の商人夫婦と、そこへ集まってくる伊達男たちの前へモルが登場する。伊達男たちは俄然色めき立って、口々にモルの名を呼び注意を惹こうとする。この煙草を一服吸ってくれとか、そばに来てくれとか、一寸話をしようとか大騒ぎをする。殊に前

述のラックストンは、一目見るなり勃然と遊心をおこし、「色情に聞えのたかいイタリア人が垂涎おくあたわずの娼婦とは、まさにモルのような女だ。金にあかせても物にしないでおくものか」と独白をする。ざわめき立つのは伊達男たちにとどまらず、店主たちも、店にある最良の品を、目にかけてましようとなにもおかぬ応対をする。その間を、モルは愛想よく誰れ彼に言葉をかけながら、店から店へと縫ってゆく。その肢体は男心をくすぐらずにはいない。

ゴスホーク いかれるほどいい女だ。こんなにぼつてりと肉づきが良いのに、こんなにきびきびしてる女なんて見たことがない。

ラックストン あの女は、一つのグループから別のグループへと、まるで脂ののつたうなぎがオランダ人の指股をぬめるように抜けてゆく。

(独白) あの女をおとすチャンスを狙うのだ。

(二幕一場一八六—一八九)

男の関心を一身にさらってゆく娼婦の出現は、女将連中にとって快いはずはなく、殊に件のラックストンを情夫にし

て金を貢いでいる煙草屋の女将は、モルを「両性具^{ふたなり}有」だと言っけなす。

ガリポットのおかみ ある人たちは、あの女は男だとためらいもなく言いきるし、ほかの人たちは、男と女の両性だと言っけのよ。

これはモルに関してしばしば言われる悪口だが、ラックストンの耳にはむしろハーマフロディテの倒錯した魅力としか聞えない。

まず女房を寝とって、次には亭主と情を通じれば素晴しかろうよ。

次にモルが、けば織の襷袢を買いに入った店のおかみは、亭主のどれついた態度に業を煮やし、言葉鋭くモルを非難する。揚句の果に、おかみはモルに店から出てゆけと言いい、モルが、自分は買物に来た客だと言っても、何も売ってやらないから店から出てゆけと喚き、女二人は互いのいかがわしい陰の商売に対する激しい非難をぶつけ合う。モ

ルは怒り心頭に発する。そこへ偶然に來あわせた縁もゆかりもない男にモルは、勝手な言い掛けをつけ、鬱憤が晴れるまで打つわ叩くわの暴行を加える。この理不尽な暴力沙汰と粗野な態度は、彼女が女番長^{ローレンス・ガール}たる由縁でもあるうが、決してモルのイメージ形成の上のプラスには働いていない。むしろ彼女の性格を放散的に稀薄化し、すぐれた作品に本来あるべき凝縮性を失わせている。

勿論ここには舞台上の効果はある。弱い性である女が、強い筈の性である男を、ただ単に鬱憤ばらしのために思いきり打擲し、男の方が悲鳴をあげながら逃げまどう姿は転倒したおかしみをかもし、客の笑いを取ったであろうことは想像に難くない。併しそれだからといって、女でありながら初めて男装したモルが、サルガードーの主張するように、女性解放運動の草分けと單純にとるわけにはいくまい。たまたま闇稼業に生きる、底辺部の住人のなかに喰いつめた女がまじっていて、生來の激しい気性のゆえに、今日で言うスケパンのな生活をしたことにとどまらと思う。解放運動と呼ばれるためには、少なくとも一つの主張とか付加価値が必要であろう。もしサルガードーの主張するように、モルが女性解放運動の草分けであったなら、必ず彼

女のあとから、何らかの形でそれを受けついでゆく動きが社会に、よしんば微弱ではあっても引きつがれていく筈で、それがあつてこそ始めて運動の先駆者たり得るのである。モルの場合は、時代の変化の先取りだとは思えない。

原作者が目ざしている、芝居の筋立てにとつて必要な、正義の使者としてのモルの像が、不思議な分裂をきたしてしまっていることはすでに述べてきたところであり、又、どういう箇所それが強く感じられるかについては、具体的にテキストからの引用をあげながら実証してきた。それではなぜ、このように奇妙な分裂がおきてしまったのかを考えてみたい。先ず考えられる理由としてモルには實在のモデルがいた。しかも、はなはだ芳しからざる性格の女である。が、よしんばそうであっても、好ましくない性格をすべて切り捨てて、単一な性格として描くことができた筈である。また實際、時としてはその路線でゆこうとする努力が読みとれる。彼女は、口さがない世間がたてる事實無根の悪評の犠牲になつてにすぎないとする、五幕になつてからの描き方である。併し、それを事實として受け入れるには、あまりにもどす黒い彼女の性格が生々しく描き込まれてしまっている。緊密な構成でならしたミドルト

ンやデッカーにして、なぜここではこのような不首尾が起きてしまっているのだろうか。

われわれはエピソードで、モルに扮した俳優がおさめの口上を述べる中で、きわめて示唆にとむエピソードに遭遇する。それはこうだ。

ある画家が女の絵を実物と寸分たがわぬように描き、ショウウィンドウに売に出しておいたら、通る人たちがそれを見て、それぞれが自分の好みを主張して様々な注文をつけた。すべての人の好み通りに描き直したら、絵の女の姿は化物のようになってしまった。この芝居でも同様のことが云える。

と彼女は云っている。つまり二人の作家の間には、ありのままのモルを描こうという了解が成立していた筈である。そのことがかえってモルの全体像の統一を損っているのではないだろうか。猥雑で粗暴なありのままの性格と、それと相容れないが、筋立ての必要からして、これもまた、ありのままとも言える、弱い者に味方をする時の勸善懲惡をめぐす彼女の姿との間には異和感というか齟齬があり、うまく溶け合っていない。

これは先ず第一には、すでに述べたように、実在のモルの評価に引きまわされていたことがあろう。第二には、モルの属する非合法社会の裏稼業をなりわいとする掏摸、掻払いの生活と実態への興味をそそろうとする狙いもある。

第三には、女の性格探究に興味を持ち続けたミドルトンのことであり、生来の辛辣な性癖はモル・フリスの肖像の内に、実在のメアリー・フリスの持つ、どす黒い悪の要素を持ち込まずにはいられなかったということがあろう。おまけに次のような事実を知る時、この推論は更に力のあるものとなる。エピソードの最終部に、モルに扮した例の役者が語る結びの台詞があつて、「お客様方がもし御満足がいきませんでしたら、二、三日うちに、女番長^{ロアリダ・ガール}自身が舞台に立ち、たつぷり埋め合わせをいたしましょう」という件がある。一体何のことかと調べてみると、一六〇五年のロンドン主教区法廷懲罰記録に、メアリー・フリスが法廷で行った自白が残っており、「一年の四分の三は幸運座^{フォーナラン}に男装で出演し、慎みのないみだらな話を聞かせたり、時にはリュートをひきながら卑猥な歌を歌った」と告白している (E. K. Chambers: *Elizabethan Stage Gleanings*, RES (1925) pp. 77-78) 当時の舞台の慣例としては、声変り

前の少年俳優が女装して女形をつとめたのであったから、

男装をした本物の女性の登場だけでも斬新な興味をそそぐに違いない。その上彼女は天性、芝居つきの感覚をそなえていた。彼女の生涯は無数の犯罪に綴られているが、そのうちの一つの咎で一六二二年の初め、セント・ポール大聖堂境内の一隅のポールズ・クロスと呼ばれる説教場で、悔悛の苦行に服する刑の言い渡しを受けた。その時の有様を、一人のロンドン市民で二七年間にわたって書簡を書き残したジョン・チェンバレンという男が、自分のパトロンであった、ジェイムズ一世の重臣で、晩年にはチャールズ一世の秘書長官をつとめ、ドーチェスター子爵に叙勲されたダドリー・カールトンに宛て次のように書き送っている
(一六二二年二月十一日〔引 Bullen, IV, 4〕)

「先週の日曜日、いつも男装で歩き、伊達男に挑んでいた巾着切りのモルという、名うてのあばずれ女が例のポールズ・クロスに引き出されました。彼女は激しく泣きながら、心から改悛の情を示しました。しかし、どうやら彼女は泣き上戸なのではないかと疑われています。と申しますのも、彼女は悔い改めの場に来る前に白葡萄酒を一本の四分の三も平

らげていたことがばれてしまっているのです。」

ことの真偽はおくとしても、もっと面白いエピソードがこれに続く。それは如何に彼女が見物人の心をひきつける才能をそなえていたかを示してあまりあるものである。当日、彼女の訓戒にあたつた説教師はブレイノーズのラドクリフという男であつたが、モルの色香に心を動かされ説教にも身が入らなかつた。それに反し、モルは自分が過ちを犯すに至つたいきさつを感動的に訴え、涙ながらに深く反省し、二度と過ちを犯さないと誓つた。その場に居あわせた会衆の心は、次第に説教師からはなれ、強くモルに惹かれていったという。彼女には天性の役者の資質があつたらしい。その本人が、この芝居が上演されていた幸運座にアトラクションの形で登場して、強烈な個性を舞台から観客に向けて発散しているのであつてみれば、作家たちにしても純粹に自分の想像による人物造型だけでは済まされなかつたであろうことは想像に難くない。第四に、そしてこれが一番大きい原因と思われるのだが、時代の嗜好が変化し始めたことであろう。プロローグにもあるように、「当今では悲劇は流行しない」のであつて、フランス亡命から

帰国し、めでたく王制復古の玉座についた陽気な新王のもとで、宮廷を中心とする世間の風潮、芝居の好みは大きく変ってきている。尤も、まだレストレイション・ドラマにおけるほど顕著な変化は表面に出てはいない。併し時代の底流は、深刻な悲劇をうっとうしがる浮薄な風俗劇をめざして、ゆるやかに併し刻々と確実に変わりつつあったのだ。

この劇にも風俗劇への斜傾が感じられる。殊に脇筋の商人家族と伊達男たちの演じるゲームとしての不倫ごっこは、明らかに後代のウィッチャレイの好んで描く、例えば『田舎から都会へ出た女房』(The Country Wife)への筋道を歴然と示している。このように風俗劇への「斜傾」を持ちながらも尚ミドルトン特有の、一人の人間像をほり下げて描くことへの執着が断ち切れずにいるところから、この芝居の得体の知れない複雑な性格が出てきたものと思われる。作家の意図のなかには、新しい女、解放され経済的自立のできる女を描くことも一つにはあった。たしかにモルは、脇筋の商家のおかみのように家長の経済力に百パーセント依存している女ではない。併し、本当の意味の女の自立にはほど遠い。いわばモルのような「スケバン」の姿は、移り変ってゆく社会の流れの上に、如何にも過渡期的性格を示

しながら、浮かんでは消える泡沫うたかたのような存在だと云えよう。時代の流れは間もなく女性問題を脇に押しやり、かつてミドルトンやウエブスターが悲劇の世界で示し得た、女の最後の砦ともいうべき、悲劇的尊厳さえも浸食し、やがてレストレイション・ドラマの凡庸なさざ波の中に問題を解消してゆく。